

【茨城】病院と大学の協働で切り拓く医療現場におけるアートの可能性- NPO法人チア・アートの代表・岩田祐佳梨氏、筑波メディカルセンター病院の病院長・軸屋智昭氏に聞く◆Vol.1

2019年8月20日 (火)配信 m3.com地域版

全国4位の医師多数区域「つくば医療圏」に属し、地域の高度医療を担う急性期主体の医療機関・筑波メディカルセンター病院。病院におけるホスピタリティ提供の一環として、筑波大学芸術系との協働によるアート・デザイン活動を積極的に行う医療機関としても知られている。活動に至った経緯やこれまでの取り組みについて、同病院から各プロジェクトのマネジメントなどアートコーディネート業務を委託されているNPO法人チア・アートの代表・岩田祐佳梨氏と、病院側のカウンターパートである病院長・軸屋智昭氏に話を聞いた。（2019年4月19日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

——筑波大学との取り組みである、医療現場におけるアート・デザイン活動を始められた経緯を教えてください。

岩田 2006年、当時の筑波メディカルセンターの中田義隆センター長の呼びかけが活動のきっかけです。冷たい無機質なものに覆われた空間である検査室前の廊下で患者さんが不安そうな顔で何時間も検査を待っているのに、職員は患者さんの顔を見る余裕もなく足早に通り過ぎていく状況がありました。「このような院内の風土を何とかしたい、この場所に患者さんがほっとするような何かを作れないか」ということで、中田センター長が筑波大学芸術系の蓮見孝教授（現・筑波大学名誉教授）に相談をされたのです。蓮見教授がこの申し出を快諾され、2007年3月に有志の学生によるアート・デザイン活動がスタートしました。



アーティストの小中大地氏と患者さん、NPOつくばアーバンガーデニングさん、病院職員で制作した「ねがいごとの森ゴブリン」

筑波大学には現在、「大学を開くアート・デザインプロデュース」という授業が開講されており、学生たちがプロジェクトチームを立ち上げ、実践の場でさまざまなプロジェクトを企画・実行しています。病院のアート・デザイン活動は、この授業の一環として行われています。



学生、教員、職員が交流しながらアイデアを交換し合うアートカフェ（写真提供：筑波メディカルセンター病院）

——プロジェクト開始から10年以上が経ちましたが、これまでにどのような活動を展開されてきたのでしょうか。

岩田 閉鎖的で冷たい廊下の雰囲気を変えようと、まずは音符に見立てたフェルトで作った種(たね)を五線譜に並べて「うた」を奏でるという「うたたね展」（2007年）を実施しました。その他にも天井から鳥のオブジェをぶら下げる「トリトリ展」など、約3か月の展覧会を合計で9回実施しました。このように、アートギャラリープロジェクトの草創期には、廊下をいきいきとした、人の手によって設えられた空間にするという活動を行いました。

次に取り組んだのは、プロダクトデザインです。「病院食滑り止めマット」や「はっぱテーブル」といった使用目的や環境に考慮したプロダクトを、職員も巻き込んで一緒に開発しました。制作したプロダクトは、今も院内で使われ続けています。



葉っぱ型の木製パーテーションも制作し、居心地の良さを演出した「家族控室」

そして現在取り組んでいるのが、空間のデザインです。病院前遊歩道の花壇を改修し憩いの場所として再生させた「紡ぎの庭」の施工、茨城県産の檜材を使用し木製の待合家具や問診票記入台を設けたエントランスの改修。また、核医学検査室の待合室の改修や誘導案内システムとサインを分かりやすく改善するといった空間・環境整備に取り組んでいます。



病院前の歩行者専用道路を草花溢れる憩いの場に改修した「紡ぎの庭」は第19回緑のデザイン賞緑化大賞を受賞

——各プロジェクトは、どのように進められているのでしょうか。

岩田 活動は、軸屋院長と広報課、施設管理課、アート活動の支援組織であるPR管理グループに所属する職員と筑波大学芸術の学生、教員が参加し、広報課職員とチア・アートのアートコーディネーターが病院と大学の間に入ってマネジメントをするという体制で実施しています。現在、筑波メディカルセンター病院にいるアートコーディネーターは2名です。毎回、軸屋先生や広報担当者と相談しながらプロジェクトを進行しています。

進め方としては、プロジェクト会議を実施したり、職員や学生やアーティストが気軽に参加できる交流の場を設けて、アートやデザインについての意見交換や報告を行います。「日常生活では普通にあるのに病院に入った途端ないもの＝“アブノーマル”を見つける」という視点で院内の課題を探したり、「職員も改善したいと思っているが、どうすれば良いか分からないこと」について議論を行っています。そして企画が決まると、リサーチとデザインの工程に入ります。リサーチ期間は、敢えて長い期間を設けるようにしていますね。なぜなら、最初からこういうものにしようと決め打ちでやるのではなく、どんなものだったらいいかという問いかけをして、そこに職員も巻き込んで一緒にやっていくというのが、本質的な課題や問題を考えるのに重要だと考えているからです。

——活動経費は、どのくらいかけて実施されているのでしょうか。

岩田 年間予算はだいたい70万円ほどで、2年をかけて行う大きなプロジェクトは合算で140万円以内におさまるようにしています。それでも費用は足りないので、プロジェクトに関わるメーカーに協賛していただいたり、病院の環境改善や学生の教育についても力を貸したいと思ってくださる企業に金銭面や技術面などでご協力いただき、何とか実現しているという状態ではあります。大学が、獲得した研究費や助成金を充てることもあります。

軸屋 70万円というのは、病院と筑波大学の芸術学系の学生を教育するために病院側が用意している金額です。ですが、それ以外にもちょこちょこ持ち出しがあるので100万円を超えないくらいではないかと思います。病院の設備修繕費を使ったこともあります。

——医療現場という特殊な場所でプロジェクトを企画・実施する際に、重視されている点はどのようなことでしょうか。また、プロジェクト内容の選定基準についても伺えますか。

軸屋 医療者は、「患者さんのために」と思って活動を実施しています。患者さんに心地よさ、ホスピタリティを提供したいというのが一番のドライブ（動因）ですよね。ですから、このモチベーションが低下しないような活動に気を配っています。

岩田 学生とのプロジェクトのほか、アーティストとのコラボレーションでアートワークショップ等も実施していますが、患者さんや職員の方達とのコミュニケーションによって生まれる作品に価値を置いてくれる方、職員の固定概念に揺さぶりをかけて、「患者さんにとって、どんな環境が必要だろう」と考えるきっかけになる作品を作る方を選ぶようにしています。あとは、医療環境を改善したい、社会課題に貢献したいという気持ちを持っている方かどうかという点もポイントになっています。



「地域の方々が、“この病院をみんなの共有の資源として、みんなで変えていきましょう”と
思ってくださいるようになるといいですね」と語る岩田氏

◆岩田 祐佳梨（いわた・ゆかり）氏

NPO法人チア・アート代表。

2011年より財団法人筑波メディカルセンターのアートコーディネーターとして活動しながら、病院と作り手の協働によるアート・デザイン活動についての実践研究を行ってきた。2017年に筑波大学人間総合科学研究科博士後期課程を修了、博士(デザイン学)を取得。2018年、東京工芸大学工学部建築学科助手に着任。現在、大学教員を務める傍ら、2017年に自身が設立し理事長を務める特定非営利活動法人チア・アートの活動に従事。2018年、公益財団法人筑波メディカルセンターからの委託を請け、チア・アートはアートコーディネート業務を担っている。

◆軸屋 智昭（じくや・ともあき）氏

1981年、筑波大学医学専門学群卒業。2003年、筑波メディカルセンター病院の診療部長（心臓血管外科）、2005年には同副院長を務め、2009年に筑波メディカルセンター病院長に就任。就任時より、筑波大学芸術系とのアートプロジェクトに関わる。2017年、特定非営利活動法人チア・アートの理事に就任。現在、公益財団法人筑波メディカルセンター業務執行理事を兼務し、つくば市医師会副会長も務める。心臓血管外科専門医、日本外科学会指導医。
所属学会は日本胸部外科学会、日本心臓血管外科学会、日本血管外科学会、日本医療マネジメント学会。